

日本での当たり前、世界での幸せ

静岡県立浜松西高等学校中部部

3年 宮川恵莉

私はごく普通の毎日をおくっている。朝起きて、学校に行って、家に帰って寝る。病気にかかったら病院に行って治し、毎日健康に過ごす。それが当たり前だと思っていた。そんなある日、英会話教室で日本の医療について話していたら、先生から

「日本では誰でも病院にかかれています。」と言われた。先生の話によると、アメリカでは医療費が高く、気軽に医療機関を受診できないとのことだった。発展途上国ならともかく、アメリカは先進国だ。十分な医療が受けられないはずがないと思い、アメリカの医療制度を調べてみた。すると、公的医療保険制度は高齢者および障害者を対象としたものに限られ、大部分の人は民間医療保険を利用しているそうだ。また、高額な医療費による自己破産、保険料が支払えない無保険者が増えており、必要な医療サービスを受けられないという問題も生じている。日本は子供は五百円、大人は医療費の三割負担で治療が受けられる。病弱な人も怪我をした人も大きな貧富の差なく健康でいられる。これは税金が医療費を負担してくれているおかげであり、幸せなことだと知った。

私はこのことをきっかけに、税金が他にどのようなことに使われているのか興味を持ち、県の財務事務所で税に関する資料をいただき読んでみた。それによると、県税は主に健康福祉費、教育費、公債費、交通基盤費、経済産業費、警察費などに使われているそうだ。無料で授業が受けられるのも、道路が整備されているのも、町が平和に保たれているのも全て税金のおかげだ。私が当たり前だと思っていた日常が税金で成り立っていて、他国から見たら当たり前ではないと学んだ。生まれる国が違えば、治安の悪い町で学校にも行けず、病院にもかかれず、貧困に苦しむ人の中にいたかもしれない。

今の私にできることは何だろうか。まずは税金に関心を持ち、社会の動きに敏感になること。少子化により納税者が減っている中で今までどおりの生活を維持するためには、税金の使い方に優先順位をつける必要がある。政治家の方々は国のために議論を重ねている。その中でも限りある税の使い道を考えてほしい。高齢者福祉、貧富拡大の抑制、学生の教育などこれから重要性が高まるものに使ってほしい。

財務事務所の方に「税は払うのではなく、納めるもの」と聞いた。『払う』はサービスの対価としてお金を渡すこと、『納める』は対価に関係なく国のためにお金を渡すこと。直接は対価が得られないかもしれない。しかし、税は身の周りの当たり前で私たちにサポートしてくれている。私も就職したら一人の納税者として責任を持って税を納めたい。日本のために、社会のために、そして未来の子供たちのために、税は必要不可欠だ。